

パスカルの《アポロジ》の プラン復元に関して(XXXVI)

竹 下 春 日

[IV] 3 自愛心——93(2), 99(4・5),
141(7), 150, 154, 164, 463(24).

(1) La. 93(2)-Br. 153 について。——この断章については、既に分類項目「2人間の空しさ(虚栄心)」の93(3)において述べてあるので、これを省く。

(2) La. 99(4・5)-Br. 100 について。——《自愛心の本質、人間のこの「自我」の本質は、ただ自分自身だけを愛し、自分のことだけをかえりみようとするものである。しかし、人間のしていることが、一体どれだけのものであろう。自分の愛する対象が欠陥と悲惨にみちたものであることを、どうしようもないではないか。大いなる者となりたいと思っても、見えてくるのは自分の小ささばかり。》(La nature de l'amour-propre et de ce moi humain est de n'aimer que soi et de ne considérer que soi. Mais que fera-t-il? Il ne saurait empêcher que cet objet qu'il aime ne soit plein de défauts et de misère; il veut être grand, il se voit petit; il veut être heureux, et il se voit misérable;)

この断章の文頭には、既に《自愛心の本質》(la nature de l'amour-propre) という語があり、この断章が分類項目の「3自愛心」中に分類すべきものであることが、理解されるが、この文章中にはまた《自分の愛する対象が欠陥と悲惨にみちたものであることを、……》(cet objet qu'il aime ne soit

plein de défauts et de misère;) という語句が、見出される。次にこの長断章の途中には、《人間の墜落》(la corruption de l'homme) なる語があり、この fr. の末尾には、次の叙述が存する——《だから、人間は、自分自身においても、他人に対しても、猫をかぶった・うそつきの・偽善者にすぎない。人間は、真実の話を聞かされるのをいやがる。他人に真実を語ることもさける。すべてこういった性向は、正義と公正の道から遠くはなれたものであるが、人間の心の中に生まれながらに根ざしているのである。》(L'homme n'est donc que déguisement, que mensonge et hypocrisie, et en soi-même et à l'égard des autres. Il ne veut donc pas qu'on lui dise la vérité. Il évite de la dire aux autres; et toutes ces dispositions, si éloignées de la justice et de la raison, ont une racine naturelle dans son coeur.)

以上の諸記述において、われわれは三つのテーマと言うべきものを見出しうる——《自愛心》(l'amour-propre)・《悲惨》(la misère)・《人間の墜落》(la corruption de l'homme) が、これである。従ってわれわれは、この断章(fr. 99)を、われわれの所謂分類項目たる三つのもの——「3 自愛心」, 「4 惨めさ」, 「5 墜落した本性」のうちに、それぞれ99(4・5), 99(3・5), 99(3・4)として分類配属せしめ得るものである。この三者が各々固有の分類項目名を有しながら、他の分類項目に所属するのは、この三つのものが相互に内面的関係を有するからである。即ち、この断章にあっては、《惨めさ》は《自愛心》が損われる結果から生ずる感情であり、自愛心なるものは、《人間の墜落》の一形態である。そうしてこの人間墜落なるものは、——パスカルの立場から観るとき——アダム・エヴァの「原罪」に由来するものである。したがって以上の三分類目の一つが、それぞれ他の項目に配分し得ることは、理の当然であると言えよう。

(3)La. 141(7)-Br. 445 について。——この断章の最初の部分は、次の如くである——《「自我」というものは、けがらわしいものだよ。ミトン君、君は、それをおおい包んでいるけれど、そんなことをしたからといって、少しもそれ

を取り除いたことにはならないのだよ。だから、君という人間が、けがらわしいものであることにかわりはないのだ。》(Le moi est haïssable: vous, Milton, le couvrez, vous ne l'ôtez point pour cela; vous êtes donc toujours haïssable.)

この文章中の《「自我」というものは、けがらわしいものだよ。》という叙述は、この断章中の要点の一つである。なぜなら、《自我》(le moi) が《けがらわしい》(haïssable) ということは、人間本性の「墮落」の一形態に外ならないからである。従って、この fr. はわれわれの分類項目「5 墮落した本性」に入り得るものである。それ故われわれは、拙論Ⅲ回（分類項目の「3 自愛心」）中の分類断章たる141(7)を、141(7・5)と訂正変更することにする。

次にこの断章中には、《だが、わたしが「自我」をけがらわしいと言うのは、それが不法なものだからだ。何ごとにつけても、自分が中心になろうとするからだ。だから、わたしは、「自我」を憎みつつける。》(Mais si je le hais parce qu'il est injuste, qu'il se fait centre du tout, je le haïrai toujours.) とあり、この文中には、《何ごとにつけても、自分が中心になろうとする》(il [le moi] se fait centre du tout) という表現があるが、これは実質上《自愛心》のことであるから、同名の分類項目（「3 自愛心」）のうちに入れたのである。

最後に、この断章中には、《不法》(injuste(s))——名詞・形容詞、単数・複数をふくむ——という語が、7個も見出される。したがって、この fr. は「7 不法なこと」のうちに分類されうる。

(4)La. 150-Br. 456 について。——この断章の主意は、次の如くである——
《……自分のさいわい、自分の幸福や生命の永続を世のすべての人のそれにもまして、ねがわない人は一人もないのである。》(... il n'y a personne ... qui n'aime mieux son propre bien, et la durée de son bonheur, et de sa vie, que celle de tout le reste du monde!)

この叙述の文章全体が、人間の利己心すなわち《自愛心》に関するものであ

ることは、明らかである。それ故この fr. は、「3 自愛心」に所属するものと、言い得る。

(5)La. 154-Br. 101 について。——《わたしは、もしすべての人がおたがいに何を語り合っているかを知ったら、この世に友は四人といなくなることは確かだと言いたい。このことは、時たま、だれかがついうっかり口をすべらして告げ口をしたために起こる争いによって明らかである。》(Je mets en fait que si tous les hommes savaient ce qu'ils disent les uns des autres, il n'y aurait pas quatre amis dans le monde. Cela paraît par les querelles que causent les rapports indiscrets qu'on en fait quelquefois.)

以上が、この断章の全文である。この fr. は、友人たちの自分に対する陰口を聞くと、友人関係が破壊されるという主旨のものであるが、これは要するに人間の自己愛の為せる業であるから、当然「3 自己愛」の分類項目に属する。

(6)La. 164-Br. 457 について。——《人はみな、自分にとって自分がすべてである。人が死ねば、自分にとってすべてが死んだのと同じだからである。そういうことから、人はみな、自分がだれに対してもすべてなのだと思いこむようになった。自分自身をもとにして自然を判断してはならない。自然に即して、自然のことを考えねばならない。》(Chacun est un tout à soi-même, car lui mort, le tout est mort pour soi. Et de là vient que chacun croit être tout à tous. Il ne faut pas junger de la nature selon nous, mais selon elle.)

この断章の主旨が、人間の《amour-propre》にあることは、明らかである。故に、La. 164 は3の「自愛心」の項目に入ることは、言う迄もない所である。

(7)La. 463(24)-Br. 583 について。——《悪らつな者とは、真理によく知っているのに、自分の利害がそれに一致する程度にしか、真理を支持しようとしなない連中のことである。しかも、いったん、自分の利害からはずれると、真理

をすててかえりみない。》(Les malins sont gens qui connaissent la vérité, mais qui ne la soutiennent qu'autant que leur intérêt s'y rencontre; mais, hors de là, ils l'abandonnent.)

この文章の最後の部分である《しかも、いったん、自分の利害からはずれると、真理をすててかえりみない。》(mais, hors de là, ils l'abandonnent.)は、人間の利己心つまり自愛心を述べたものであるから、この断章は「3自愛心」の項目に配属させうると共に、《悪らつな者》(les malins)への批判をも述べているので、われわれの分類項目24の「不信仰者に対する批判と教導」のうちにも入れることが出来る。この項目中に、463(3)が見出される所以である。

[V] 4 惨めさ——99(3・5), 125(8), 126(2), 128(18), 129, 131, 133, 227.

(1)La. 99(3・5)-Br. 100 について。——この断章については、既に[V]の(2)において触れられておるので、省くことにする。

(2)La. 125(8)-Br. 437 について。——《わたしたちは真理をねがい求めながら、自分のうちに見出すものはただ、不確定だけである。/わたしたちは幸福を求めながら、見出すものはただ悩みと死だけである。/わたしたちは、真理と幸福をねがい求めずにはいられない。しかも、確実なものも幸福も得ることができない。……》(Nous souhaitons la vérité, et ne trouvons en nous qu'incertitude./Nous cherchons le bonheur, et ne trouvons que misère et mort./Nous sommes incapables de ne pas souhaiter la vérité et le bonheur et sommes incapables ni de certitude ni de bonheur....)。

この断章は、われわれが一読しただけでも、人間の《惨めさ》を叙していることは、明瞭である。文中の《Nous ... ne trouvons que misère et mort.》は、端的にこれを示している。それ故、この fr. は、分類項目「4 惨めさ」に入れるべきものである。

次にこの断章は、内容上必然的に、人間の不幸にも関係しているので、分類項目8の「不幸とその隠蔽」のうちにも、配属せしめる必要が存するのである。

(3)La. 126(2)-Br. 174 について。——この断章については、既に[Ⅲ]の「2 人間の空しさ (虚栄心)」の中の、126(4)において触れて置いたので、省くことにする。

(4)La. 128(18)-Br. 171 について。——《惨めさ——わたしたちの惨めさをなぐさめてくれる唯一のものは、気ばらしである。ところが、これこそ、わたしたちの惨めさの中で最大のものなのである。なぜなら、わたしたちに自分自身のことを考えないようにさせ、知らず知らずのうちにほろびにいたらせるものは、主としてこの気ばらしだからである。……気ばらしは、わたしたちを楽しませ、知らず知らずのうちに死に至らせる。》(*Misère*. — La seule chose qui nous cosole de nos misères est le divertissement, et cependant c'est la plus grande de nos misères. Car c'est cela qui nous empêche principalement de songer à nous, et qui nous fait perdre insensiblement. ... le divertissement nous amuse, et nous fait arriver insensiblement à la mort.)

この断章のタイトルは、《*Misère*》である。したがって、この断章は「4 惨めさ」の分類項目に所属すると、言いうる。次にこの fr. の内容は、《惨めさ》と本質的に係わる《気ばらし》(le divertissement) について、述べている。それ故この断章は、分類項目の「18気晴らし」に入りうる可能性を持つことは、明らかである。

(5)La. 129-Br. 399 について。——《人は、意識しなければ、惨めではない。つぶれた家は、惨めでも何でもない。惨めなのは、人間だけである。「わたしは、悩みにあった人である。」》(On n'est pas misérable sans sentiment: une maison ruinée ne l'est pas. Il n'y a que l'homme de misérable.

Ego vir videns.)

以上が、断章 La. 129 の全文である。この文章全体を通読すれば、《惨めさ》を意識した人間の惨めさなるものを、叙していることは明瞭であるから、この fr. は「4 惨めさ」の項目中に分類されうる。

(6)La. 131-Br. 406 について。——《ありとあらゆる惨めさに取りかこまれていても、傲慢がこれと張り合い、これを取り去る。傲慢とは、さても奇妙な怪物であり、だれの目にも明らかな錯乱である。傲慢は今や自分の地位から転落しており、不安そうにもとの地位をさがし求めている。人間のだれもがしているのは、まさに、こういうことである……》(L'orgueil contrepèse et emporte tous les misères. Voila un étrange monstre, et un égarement bien visible. Le voilà tombé de sa place, il la cherche avec inquiétude. C'est ce que tous les hommes font. ...)

この断章は、《ありとあらゆる惨めさ》(tous les misères) と、人間の《傲慢》(l'orgueil) との関係について述べ、傲慢が自分の地位から転落して、《不安そうに》(avec inquiétude)、元の地位を捜し求めていることに、触れている。この状態は、人間の《惨めさ》以外の何ものでもない。即ち、この傲慢と転落状態は、人間悲惨の一形態に外ならない。したがってこの断章は、内容から言って、分類項目4の「惨めさ」に属すると、言いうる。

(7)La. 133-Br. 90 について。——《「しばしば見なれているものだと、その原因がわからない場合でも、おどろかない。けれども、今まで見たことがないようなことが起こると、それを世にもめずらしい事と見なす。」(583)「さてもさても、この男は、非常な努力をして、わたしに実にばかげたことを言うとしている。」/「自分の空想のとりこになっている人間ほど、あわれな者がまたとあろうか」(プリニウス)。(Quod crebro videt non miratur, etiamsi cur fiat nescit; quod ante non viderit, id si evenerit, ostentum esse censet. Cic./583.——Nae iste magno conatu magnas nugas dixerit./Quasi quicquam

infelicius sit homine cui sua figmenta dominatur. Plin.)

この断章全文は、パスカルによってラテン語で書かれているが、この文中の「さてさて、この男は、非常な努力をして、わたしに実にばかげたことを言おうとしている。」(Quoi de plus malheureux que l'homme esclave de ses chimères.)* は、人間の愚かさ及び人間の不幸、一言にしていえば人間の「惨めさ」を叙しているのです。この断章は「4 惨めさ」の分類項目に入る。

* 仏訳はすべて、Lafuma による全集版 (Éditions du Seuil, 1963) の註 (p. 575) に拠る。

(8)La. 227-Br. 411 について。——「わたしたちの心をしめつけ、のどもとを押さえつけてくる自分たちの惨めさのことごとくを目にしながらも、わたしたちは、自分を高めようとする、抑えがたい本能を持っている。」(Malgré la vue de toutes nos misères, qui nous touchent, qui nous tiennent à la gorge, nous avons un instinct que nous ne pouvons réprimer, qui nous élève.)

この断章の前半は、「nos misères」の深刻さに、迫力ある筆致をもって触れて居る。この断章が、「4 惨めさ」に分類しうる所以である。それと共に、後半の部分は、「わたしたちが、自分を高めようとする、抑えがたい本能を持っている」旨を、述べている。この文章は、パスカルの立場からすれば、人間の「偉大」(la grandeur) を、意味するものである。なぜなら、「人間が偉大なのは、自分の惨めさを知っているという点において偉大なのである」(La grandeur de l'homme est grande en ce qu'il se connaît misérable.) (La. 218-Br. 397) から。われわれ人間が、「自分を高めようとする」のは、自分の惨めさを知っているからこそである。それ故われわれは、fr. La. 218 により、この断章が分類項目「12人間の偉大さ」のうちにも、配属せしめうる理由を見出すのである。従ってわれわれは、拙論第Ⅲ回における「自然的分類の表」中の「12人間の偉大さ」のうち、「227(4)」を挿入附加することにする。

[M] 5 墮落した本性——99(3・4), 130, 132, 134(48), 136, 137, 145, 166, 311(48), 601(41), 609(41), 702, 714.

(1)La. 99(3・4)-Br. 100 について。——この断章については、[N]の「3 自愛心」の99(4・5)において、既に配属理由を述べておいたので、叙述を省くことにする。

(2)La. 130-Br. 441 について。——《わたし自身は、次の事実をそのとおりと認める。人間の本性は墮落しており、神のもとから転落しているという原理を、キリスト教によってはっきり教えられてみると、目が開かれて、いたる所でこの真理のしるしが見えるようになる。つまり、この自然には、人間の中においても、人間の外においても、いたる所に、失われた神と墮落した本性がしるしづけられているということである。》(Pour moi, j'avoue qu'aussitôt que la religion chrétienne découvre ce principe, que la nature des hommes est corrompue et déchue de Dieu, cela ouvre les yeux à voir partout le caractère de cette vérité; car la nature est telle, qu'elle marque partout un Dieu perdu, et dans l'homme, et hors de l'homme, et une nature corrompue.)

この断章中で、パスカルは《人間の本性は墮落しており、神のもとから転落しているという原理》(ce principe, que la nature des hommes est corrompue et déchue de Dieu)に触れているので、当然乍ら、この断章は「5 墮落した本性」の分類項目に所属すると、言いうる。

(3)La. 132-Br. 439 について。——《墮落した本性——人間は、理性によって行動していない。理性こそ、人間の本質であるのに。》(*Nature corrompue.*——L'homme n'agit point par la raison, qui fait son être.)

この断章のタイトルは、《墮落した本性》(*Nature corrompue*)であるので、この断章 La. 132-Br. 439 が、「5 墮落した本性」の分類項目に入るこ

とは、明らかである。

(4)La. 134(48)-Br. 408 について。——《悪は容易なので、無数にある。善はほとんど一つしかない。だが、ある種の悪は、善と言われるものと同様に、見出しがたい。こういう特長があるので、しばしばこの特殊な悪が、善と見なされることがある。この悪に到達するにも、善に到達するのと同様、やはり並々ならぬ大いなるたましいが必要である。》(Le mal est ais , il y en a une infinit ; le bien presque unique. Mais un certain genre de mal est aussi difficile   trouver que ce qu'on appelle bien, et souvent on fait passer pour bien   cette marque ce mal particulier. Il faut m me une grandeur extraordinaire d' me pour y arriver, aussi bien qu'au bien.)

この断章の初めの部分は、善悪の一般的特性について、述べている——《悪は容易なので、無数にある。善はほとんど一つしかない。》(Le mal est ais , il y en a une infinit ; le bien presque unique.) したがって、「5 墮落した本性」の項目中に分類することが、出来る。

しかし他方において、《或る種の悪》(un certain genre de mal) と、《善と〔人に〕言われているもの》(ce qu'on appelle bien) 及びパスカルの考える真の《善》(le bien) との関係について言及して居る。これは前出の一般論を、一步越えた所論であり、これは善悪にかんするパスカル独自の所説であると、言い得る。それゆえ、われわれは、分類項目中の「48善と悪(美德と悪徳)」にも配属せしめたのである。

(5)La. 136-Br. 102 について。——《悪徳の中には、その他の悪徳のおかげでわたしたちにつながっているにすぎないものがある。そういう悪徳は、幹を取り去れば、枝葉のように除かれてしまう。》(Il y a des vices qui ne tiennent   nous que par d'autres, et qui, en  tant le tronc, s'emportent comme des branches.)

この断章は、《悪徳》(des vices) のうち特色のあるものに就いて述べて

パスカルの《アポロジ》のプラン復元に関して (XXXVI)

いるが、悪徳は勿論、人間本性の墮落を示すものであるから、この fr. は「5 墮落した本性」の分類項目に入る。またこの fr. は《悪徳》について論じているので、48の「善と悪（美德と悪徳）」の項目に、当然所属する。

(XXXVI 回了)